

図録 コレミテ



青春
民玩

民俗玩具研究会

なつかしの



KOREMITE

9

民玩★注目トピック

1 新作オシラ神像

2 たのしい大学祭

3 部員勧誘大作戦



東北学院大学博物館
収蔵資料図録

目次

ごあいさつ	P1
主要人物紹介	P2
昭和49年 民玩の誕生	P3
昭和49年 民玩の夏合宿	P4
昭和49年 大学祭への参加	P5
昭和49年 民玩の方針と議論	P8
昭和49年 民玩の風あげ	P9
昭和49年 さまざまな民玩風	P10
昭和50年 来たれ会員! 新入生勧誘と新たな活動方針	P12
昭和50年 遠野への調査	P14
コラム: 岩崎敏夫と柳田國男	P15
昭和50年 民玩の夏合宿	P16
昭和50年 大学祭への参加	P17
昭和50年 急募! 男子会員!	P18
“民玩”を通して	P19
掲載一覧／引用・参考文献一覧	P21

本書は、かつて東北学院大学に存在し、当博物館にいくつかの資料を残した「民俗玩具研究会」の、発足後約2年間の活動記録です。会の発起人である小玉敏さんのお話と、当時の議事録・活動記録ノートの内容にもとづき、構成しています。

ごあいさつ

—今、考えたら「なーんだ」という事も数々ありましたが、あの頃はみんな真剣そのものでした。民玩にかける青春と言っても過言ではないほど、明けても暮れても民玩でした。—

(佐藤 1984)

時は昭和40年代、高度経済成長という大きな、そして新しい時代の変化を肌を感じながら、幼い日に親しんだ手作りのおもちゃにもう一度触れ合う機会を作ろうと、この東北学院大学で学生たちがひとつの会を発足させました。民玩(みんな)ー民俗玩具研究会です。

そこからおよそ50年を経て、私たちの博物館で整理をしていた民俗玩具の一部が、この会の活動によるものであったことがわかりました。そして幸運にも、民玩の会員OBの方から当時の活動の様子をうかがうことができました。

資料とそのお話から見てきたのは、手で玩具を作ることへの愛着や、イベントの準備に奔走しながらも、「玩具とは何か? “民玩”とは何か?」という問題に正面から向き合い続ける先輩方の熱き姿。

本図録では、皆さまと一緒に聞き書きを追体験しつつ、学院大の在りし日、民玩の足跡をたどることが叶いましたら幸いです。

主要人物紹介

民俗玩具研究会の物語には、二人の主要人物が登場します。^{ほっ き にん}発起人として会を立ち上げた^{こ だまざとし}小玉敏さん、顧問を務めた^{いわさきとし お}岩崎敏夫先生です。研究会の具体的な説明に入る前に、まずはお二人のご経歴について紹介します。



小玉敏さん



2023年7月27日、残された資料を前にお話をうかがいました。
(写真右が小玉敏さん)

昭和30(1955)年、宮城県宮城郡七ヶ^{しち が はま}浜町生まれ。昭和49(1974)年4月に、文学部史学科(現 文学部歴史学科)に入学しました。入学後まもなく、民俗玩具研究会を立ち上げ、昭和49・50年度の2期にわたって会長を務めました。卒業後は学芸員として、地域文化の研究・教育普及活動に尽力しました。



岩崎敏夫 先生

明治42(1909)年、福島県相馬郡松ヶ^{まつ が え}江村(現相馬市)生まれ。東北を代表する民俗学者として活躍し、東北学院大学では、昭和43(1968)年から昭和59(1984)年まで、民俗学・博物館学を講じました。

民俗玩具研究会の顧問を務め、「玩具／遊びとは何か」について、民俗学の視点から学生たちに教授しました。

昭和49年4月～5月

民玩の誕生

民俗玩具研究会は、どのようにして誕生したのでしょうか。発足の動機と経過について、小玉さんはつぎのように語ります。

手づくりのおもちゃに着目

大学に入ったものの、あのころインベーダーゲームが流行ったり、機械物だけでね。私たち、小さいとき竹鉄砲つくったり、竹馬つくったりしたから、そういうもので遊べないかっていうことで。竹とか木の温もりのあるもので、出発できないかっていうことで。

仲間をつくって組織化

俺は小さいとき、こんな風に遊んだんだけど、そいなのできねえべか、ということで、何人か集まって。そして、自分たちでおもちゃをつくって遊びましょう、ということで、集まって話してた。

岩崎先生との出会い／研究会の発足

グループリーダーの石川先生(石川勲教授:中小規模気候学)にお話を伺ったっけ、民俗学の岩崎敏夫先生を紹介されて、「玩具というのはこういうもんだ」とか教えていただいた。それから「研究会」として、昭和49年5月に発足した。

「つくって遊ぼう」がスタート

「自分たちでつくって遊ぼう」がスタートだったの。史学科が2グループあって、まわりの人たちに「遊び物の玩具を使った活動やりてえんだけど、まざっかい」とか言って。それで集まって発足した、と思っていますね。

昭和49年8月4～7日

民玩の夏合宿

民俗玩具研究会では、会員が親睦を深めながら玩具について理解することを目的とした合宿を夏休みに行なっていました。ここでは、昭和49年8月4日から7日に行われた合宿での岩崎先生の講話と作品製作について紹介します。



小玉さん

岩崎先生に直接お話をしてもらって、みんなに玩具について理解してもらいたと思って、来ていただいて。先生は「面白いね、こういう人たちがいると嬉しい」なんて言ってさ。



写真：はじめての夏合宿
（宮城県柴田郡川崎町青根にて）
（『10周年記念誌 民玩』P.1より）



岩崎先生

昔の子供は、おもちゃがどうして動いて飛ぶのかということを作りながら体得していきました。子供の遊びの基本は信仰であり、特に「面」は信仰的な要素が強いものです。子供の生活は、大人の生活と深い関わりがある大事なものであり、信仰が中心になっています。

「8月5日岩崎先生のお話」【資料A】P.12-3より

● 合宿での製作物 ●

カマカミサマ（現存資料なし）

宮城県から岩手県南部を中心に、土間の竈近くの柱に祀られる面の形態をした神です。材質は木製のほか、目に貝や瀬戸物のかけらをはめ込んだ土製の面もあります。合宿では、8月6日に製作したようです。

指人形（現存資料なし）

指にはめて動かして遊ぶ人形です。合宿では、8月5日から製作をはじめ、7日に完成したようです。

昭和49年10月19～20日

大学祭への参加

研究会が発足してわずか5か月後の昭和49年10月、研究会は大学祭に参加しました。その後も記録が残る昭和59年まで、研究会はほぼ定期的に大学祭に参加しています。



自分たちで遊ぶだけではなくて、研究会の活動をPRしましょうってということで、大学祭にも出るということを決めて、その目標に向かって準備したりしたの。会の発足当初の年から大学祭に出てたんでねえかな。なんか目標がねえと駄目だったつうことで。

昭和49年の大学祭では「童」というテーマを掲げ、紙人形や竹トンボといった「手作りの玩具の良さ」を再認識して、それを広く一般にアピールすることを目的に参加しました。

実際に教室では、会員が作った作品を展示したり、お客さんに折紙を折ってもらうワークショップを開催したりしました。建物の入り口では会員が竹馬に乗ってデモンストレーションを行ったようで、あの手この手で集客を図った感じがうかがえます。

竹馬

足置き部分はね、本当の材木買えばいいんだけども、そんな金ねえっちゃ。窓の棧あっちゃ。そういう古材の寄せ集めだから。みんなで、どっかで見つけたのを持って来てとかして材料を調達したの。部費だって何百円しかないから、買って作るのだってなかなか難しかった。



No.1

竹とんぼ



No.2

これは羽根が真ん中にひとつだけ、下にもうひとつ付けてダブルにして飛ばしたり、軸には串を利用したりと工夫をしたんだ。



鳴りゴマ



No.3

鳴りゴマはグルグル手で振り回して遊ぶ。ほんとは割れたものがくっついて蓋^{ふた}になってるから、回すと空気が入ってカラカとか・・・ビュンって鳴んのね。



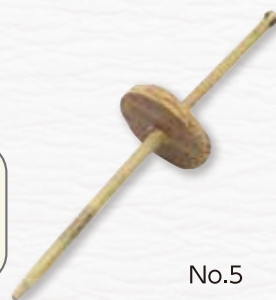
ああ、これ鳴りゴマの上の部分しか残らなかったんだ。芯の部分しか残ってねえんだわな。



No.4

これは、口に当ててビュンビュンって鳴らすアイヌのムックリ^{こうきん}※を真似て作ったんじゃないかな。

※小玉さんはアイヌの口琴「ムックリ」と推測されていますが、実際には鳴りゴマを回転させるために巻きつけた紐を引くときの、押さえ板の可能性もあります。なお「ムックリ」の詳しい説明は『KOREMITE』vol.4をご参照下さい。



No.5

折紙



No.6



No.7

船とか小さい物ばかりだとアピール力が少ないので、こういう少し目立つやつをっていうことで作ったものかな。紙もそのために、大きいのを商店街に行って買ったの。あとこういう折紙を貼った色紙の縁は、自分たちで作ったんだ。



No.8



No.9



No.10



研究会の活動記録によると、昭和49年の大学祭期間中はお客さんにアンケート調査を実施しています。大学祭終了直後の21日には会員でアンケートを回し読み、反省会を開いたようです。この中で、「今後は、歴史性や地域性中心にまとめていったらよいのではないか」といったように、早くも今後の活動を模索^{もさく}するかのような発言がなされているのが注目されます。

昭和49年10月～11月

民玩の方針と議論

大学祭を無事に終えた民俗玩具研究会では、活動方針を決める議論が白熱しました。議論の内容は、研究会の活動計画から会則の改正、会員の参加姿勢にまでも及びました。

研究会では、活動方針や会員の意識などの問題を、はやくから認識していましたが、この時期には例会や総会を頻繁に開き、会員同士で問題解決にむけて、さまざまな議論を行ったようです。

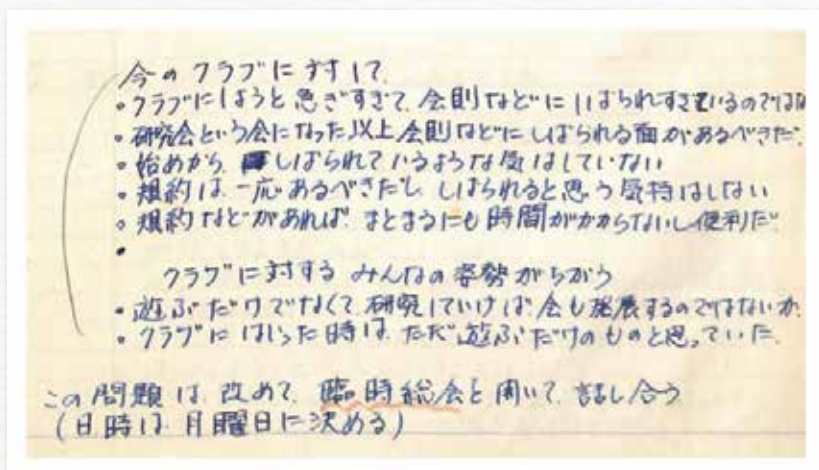
「(玩具の)製作と研究のどちらに重点をおくべきか」

「会則の趣旨をもう一度考え直してみよう」

...など、会員たちはよりよい研究会の運営をめざし、意見を交わしました。



この頃は、研究会の運営の根本的なところを、何回となく臨時総会とか開いて話し合っ。毎日話ばかりだから、やめなくなっちゃうなんて人もいた。



写真：昭和49年11月16日の総会議事録の一部(【資料A】P.29より)

昭和49年11月～

民玩の凧あげ

研究会の活動方針をめぐる議論の末、昭和49年11月下旬の総会/例会で決まったのは、凧の研究と製作を進めてゆくことでした。凧の歴史や分布、地域ごとの種類などを研究し、会員自らの手で作って遊びました。

お話をうかがった小玉さんは、研究会の活動でとくに印象に残っているのが、凧を扱った活動だといいます。



写真：昭和51年11月24日の第1回凧上げ大会(『10周年記念誌 民玩』P.1より)



俺はトンビ凧作ったんだ。トンビの姿した凧。俺(写真右端)が持ってるのがトンビ凧だ。こいつは大学の屋上で飛ばした。俺の隣の人が持ってるのは、武者絵の凧。青森のねぶた師の人だかが描いた絵を、誰かがもらったか何かして、骨組んで作ったんだ。その隣の人持ってる「民玩」って文字書いた凧も作った。

製作した凧は大学の屋上であげていました。昭和51年には研究会の行事として「凧上げ大会」をはじめて開催し、その後もほぼ毎年のように開催しました。こうして凧あげは、民玩の恒例行事となりました。

昭和49年11月～

さまざまな民玩凧

ここでは、民俗玩具研究会の会員たちが製作した凧たちを紹介します。凧は主に、紙と竹で製作されています。骨組みの材料となる竹は、会員たち自らで採集していたといいます。



No.11



自分たちで竹採って、削って。俺たちの時は富沢^{とみざわ}（仙台市太白区富沢^{たいはく}）から採って。あそこは当時山だらけで、竹だって何だっていっぱいあった。富沢の仲間の家さ行って「なんぼでも採ってけ」って言われて、車借りて採ってきたんだ。



No.12



凧は竹を削んのがまずひとつよ、均一になるように。骨を組んだら、風受けて力が入ったところは壊れっから、紙を貼って補強して。

屋上で凧上げやったのよ。そんなときね、風に負けてバリバリバリッとなって、壊れてしまったのもあった。



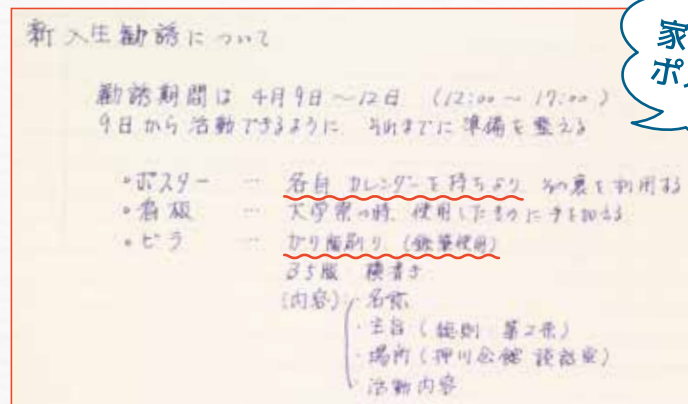
No.13

昭和50年4月～6月

来たれ会員！ 新入生勧誘と新たな活動方針

昭和50年4月、発足から1年がたち、新しい会員を迎え入れる季節になりました。研究会の宣伝はポスター、看板、ビラとぬかりありません。いざ、勧誘！

当日は説明会も併せて開催し、男子5人、女子8人が新会員登録となりました。



写真：昭和50年4月5日の会議議事録の一部(【資料A】P.42より)



No.14

ガリ版刷りって何??
とうしゃばん
→ 謄写版という印刷方法で、
鉄筆で原紙を切って文字や絵
を書く方法だよ。切る時にガ
リガリと音がするからガリ版
刷り！

新入生のオリエンテーションも企画！上級生が
活動を教え、竹細工や折り紙を体験してもらう。

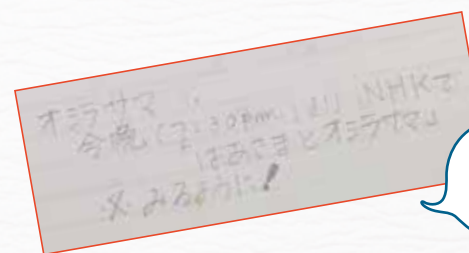
◎新たな活動へ

新入生の勧誘とともに、民玩も新しい活動の年度がスタートします。議題にあがった内容は、“オシラサマ”と“草木あそび”でした。

オシラサマは、事前に勉強をした後、夏の合宿で現地調査と製作をすることが決まっていきました。合宿をひかえた5月や6月は、オシラサマの実物を岩崎先生の研究室で見せてもらうように呼びかけたり、予備知識をまとめたり…。

草木あそびでは、6月ごろに野草園(仙台市太白区茂ヶ崎^{もがさき})に行き、いろいろな遊びを教えてもらってはどうかという意見も。

その後この活動は、秋の大学祭への参加テーマ「おしらさまと草木あそび」へつながっていきます。



写真：昭和50年6月23日例会議事録の一部(【資料A】P.62より)



No.15



No.16

※竹筒に丸めた紙を詰めて飛ばします。

昭和50年7月28日出発

遠野への調査

昭和50年度の活動内容の一つとして「オシラサマ」の調査研究と製作が決まったことを受け、7月になると実際に岩手県遠野市へ資料調査に出向きました。

オシラサマとは、主に青森県・岩手県を中心とした東北地方で、家の神や蚕の神、農業の神、馬の神などとして信仰されているものです。そのオシラサマ信仰が色濃く残る遠野市は、柳田國男が著した『遠野物語』の舞台として知られています。



遠野市の位置



遠野に行くとほら、オシラサマとかカップ淵とか、そういうのもあるでしょ。だから最初、オシラサマをちょっと調べましょってということで、調査に行ったんだ。

会員の中から調査に派遣されたのは5名。経費の半分を部費から捻出した^{ねんしゆつ}り、岩崎先生に宿泊先を斡旋^{あつせん}してもらったりと、調査にあたっては学生ならではの苦労があったことがうかがえます。



学生の特権っていうのは、時間はあるけど金ねえ（笑）。だから岩崎先生に、「どこどこにはこういう人いるから、その人を訪ねて行くと大丈夫だから。」って言われる。そしてね、ちょこっとしたお土産持って行って、その人にお世話になったの。遠野の八幡神社にも泊めてもらったりしたんだ。

COLUMN

コラム 岩崎敏夫と柳田國男

柳田國男(明治8年-昭和37年)は日本民俗学の創始者と呼ばれる人物で、名もなき庶民^{じやうみん}(常民)の歴史や文化に強い関心を持っていました。岩崎敏夫が柳田國男の名を知ったのは、昭和2年の國學院大學在学中のことでした。当時教壇に立っていたのは、『古代研究』や『死者の書』などで知られる折口信夫^{おりぐちのぶ}。彼は柳田の弟子にあたり、尊敬のあまり講義の間に何度も柳田の名を出す折口に対して岩崎は、「私共が偉いと思っている折口先生が神様のように思っている柳田という人はどんなに偉い人か」(岩崎1991、pp.177)と不思議がったようです。

昭和10年、当時岩崎は国語教師として福島県立磐城高等女学校(現・福島県立磐城桜が丘高等学校)に勤めていましたが、東京の日本青年館で行われた「日本民俗学講習会」に出席し、そこで初めて柳田と会います。この講習会は現在の日本民俗学会の前身である「民間伝承の会」が発足するきっかけになりましたが、同時に岩崎自身も柳田に師事し、民俗学を勉強しようと決心した会でもありました。

その後岩崎は柳田から民俗学を学びますが、福島在住の岩崎が東京に住む柳田に頻繁に会って教えを乞うことも難しく、「時々上京して(柳田に…引用者註)拝眉^{はいび}するほかは手紙で教えを受けることが多かった」(岩崎1976、p.71)と回顧しています。しかし柳田は岩崎の書簡にこまめに返信をし、岩崎の学位論文「本邦小祠の研究」の原稿に目を通した時も「近頃こんなに丁寧に人の論文を見たことがなかった」(岩崎1973、pp.313-314)と話すほど、柳田が岩崎に対して細やかな指導をしていたことが分かります。また岩崎は戦時中に動員学徒の監督として度々上京しており、そのたびに柳田宅へ訪問していました。戦況が悪化していた昭和20年の3月には、柳田は自身の調査カードを疎開^{そかい}のつもりで岩崎に託すなど、この頃から両者の間で信頼関係が築かれていた様子がうかがえます(岩崎1995)。

ところで、岩崎は東北で民俗学研究を進めるべく、戦後多くの研究会を発足させました。その中のひとつに、「東北民俗の会」があります。会の発足当初、岩崎は柳田に顧問を引き受けてもらえるよう依頼し、柳田も承諾しています。また物資が欠乏する戦後に岩崎夫婦が手製で製本した論集に対して「岩崎君が妻君にも手伝わせてつくった本だから、みんな大事にするんだよ」(岩崎1973、p.269)と会員の前で岩崎の労をねぎらう発言をしており、研究会に対する協力と岩崎への気遣いを忘れない柳田の人柄が見て取れます。こうした師匠の姿が、岩崎が民俗玩具研究会の顧問を快諾したり合宿に気さくに参加し講話したりしたことに影響したのかもしれない。

昭和50年8月6～9日

民玩の夏合宿

昭和50年8月の合宿は、6日から9日までの日程で開催され、7日と8日の2日間で「新作オシラ神像」(オシラサマ)が製作されました。「新作オシラ神像」は同年の大学祭で発表され、研究会の活動を広く知ってもらう機会となりました。



写真：多くの会員が参加した昭和50年の夏合宿(川崎町青根にて)
(『10周年記念誌 民玩』P.1より)



No.17

No.18

昭和50年10月18～19日

大学祭への参加

昭和50年度は「おしらさまと草木あそび」というテーマで大学祭に参加しました。この時は合宿で製作したオシラサマや草木遊びなどの作品展示のほか、遠野調査で作成したスライドの上映も行いました。

この年の大学祭期間中もお客さんにアンケート調査を実施しました。アンケートの中に、「おしらさまを前にしていましたか」、「草木あそびはうまくできましたか」といった具体的な物の質問項目がある点が前年と違う点です。また、大学祭終了直後の20日にはアンケートをもとに反省会を開きましたが、この時の記録にすでに男子部員の^{かつぼう}渴望があり、これが翌月の部員勧誘に直結したものであると思われます。



No.19

No.20



No.21

昭和50年11月

急募！男子会員！

11月に入り、かねてより少なかった男子会員が続けて退会するという出来事がありました。力仕事をはじめ、人手がピンチになってしまった民玩メンバー。急ぎよ、秋の会員勧誘を決定します。

◎男子会員を増やす活動は何をしよう？

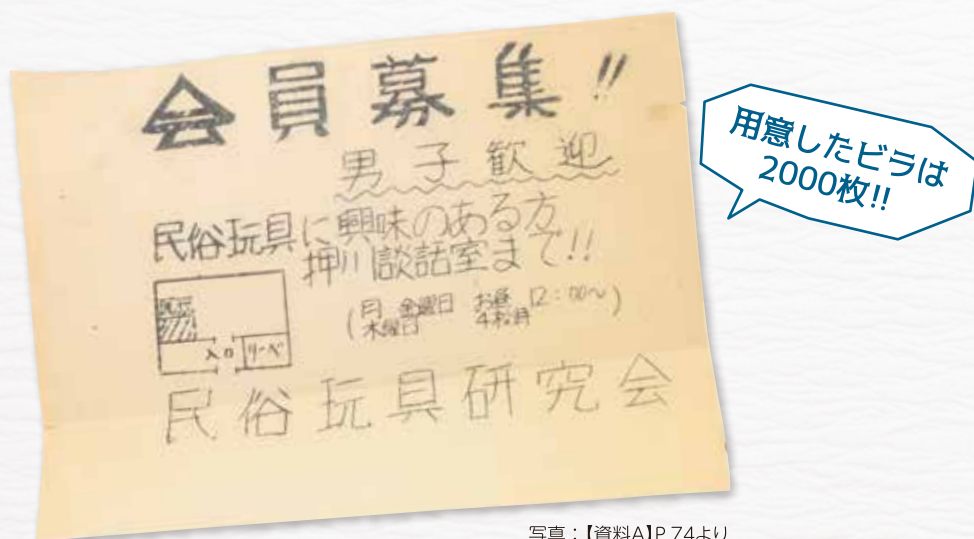
イカダ製作、トーテムポール製作、たこ、けん玉、木の彫刻(版画や人形)、だるま落とし…

▶ **アクティブな玩具づくりを提案!**

◎どういうふうにPRしよう？

▶ **実際に製作していることをわかってもらうために、目立つ場所で製作してみたらどうだろう!**

さまざまなアピールの方法案が出されました!



写真：【資料A】P.74より

“民玩”を通して

－ 作って遊ぶ面白さ、活動を営む難しさ －

「青春、民玩!」いかがでしたでしょうか。

「機械物」があふれはじめた中で、もう一度自分たちでおもちゃを作る面白さ、材料を工夫する楽しさを体験できる会として民玩はスタートしました。

一方で、民玩を自分たちはどんな会にしていきたいのか、遊ぶだけでいいのだろうか—会員たちは常に悩み、試行し、反省を繰り返しました。各テーマからも、その様子がうかがえたかと思えます。これを伝えてくれた資料のひとつが、民玩の会議の議事録と、夏合宿や大学祭での製作・活動記録が記された2冊のリングノートです。日を空けずに開かれる会議の中で、会員たちが葛藤^{かつとう}しつつづける様子が記録されていました。

一方、そんな学生たちをあたたかく見守っていたのが、岩崎先生です。小玉さんいわく、全国から集まる大学生の活動が方向を間違わないように、ただ遊ぶだけではなく民俗学的な意味を会員たちが共有できるようにと学生たちを導きました。

一少くとも民俗玩具研究会の会員諸君は、新しい玩具をつくり出す喜びを味わったり、玩具を通して子供の世界を見通したり、いろいろ為すべきことは多くても、玩具の発生を研究し、古代日本の思想の源につながる玩具の意味を見直すことも常に忘れないで欲しい。現在の玩具を趣味的にいじりまわすことは誰にもできるが、玩具の本質的な見方をすることができるのは、研究会の諸君でなければならないのである。—

(岩崎 1984)

小玉さんは卒業後も岩崎先生と交流があったと話します。
民俗玩具を作るだけではなく、活動を通してできた仲間や恩師、葛藤しながらもみんなで会を運営してきたあゆみそのものが”民玩“だったのだといえるかもしれません。



民玩の活動をいまに伝えてくれる資料
左から、『10周年記念誌 民玩』、議事録(【資料A】)、製作・活動記録(【資料B】)

一夏の合宿、大学祭、新入生の勧誘と思い出は尽きません。きっとみんな一人一人が胸の中にそれぞれの思い出をもっているでしょう。民玩は、私の大学生活の中で大きなウエイトをしめていました。人とのつながり、活動の中で古いもの新しいものとの出会い、いろいろな意味で民玩あっての私でした。この思い出をいつまでもいつまでも大切にしたいと思います。—

(佐藤 1984)

■掲載一覧

掲載No.	資料名称	法量(mm/縦×横×厚さ)	材 質	製作年月日	資料番号	備 考
1	竹馬	1909×(足乗せ台343)	竹・紐		0682	東北学院大学博物館所蔵
2	竹トンボ	羽部：158×22×3 軸部：153×3×3	竹	S49.10	0690	東北学院大学博物館所蔵
3	鳴りゴマ	225×(直径60)	木・竹	S49.10	0689	東北学院大学博物館所蔵
4	鳴りゴマ(竹板)	187×23×8	竹	S49.10	0685	東北学院大学博物館所蔵
5	鳴りゴマ	142×(直径37)	木・竹		0146	東北学院大学博物館所蔵
6	千代紙人形	308×333	紙	S49.10	0168	東北学院大学博物館所蔵
7	折り紙びな	306×343	紙	S49.10	0170	東北学院大学博物館所蔵
8	折り紙般若	337×306	紙	S49.10	0166	東北学院大学博物館所蔵
9	折り紙亡者	336×308	紙	S49.10	0165	東北学院大学博物館所蔵
10	折り紙舟	192×44×48	紙	S49.10	0688	東北学院大学博物館所蔵
11	風	720×520×75	紙・竹・糸	S49.10	1042	東北学院大学博物館所蔵
12	風	830×810×140	紙・竹・糸・ビニール	S49.10	1043	東北学院大学博物館所蔵
13	風	570×500×45	紙・竹・糸・ビニール	S49.10	1044	東北学院大学博物館所蔵
14	折り紙かぶと(赤)	134×175	紙	S49.10	0686	東北学院大学博物館所蔵
15	折り紙かぶと(青)	185×136	紙	S49.10	0687	東北学院大学博物館所蔵
16	紙鉄砲	272×11×11	竹	S49.10	0692	東北学院大学博物館所蔵
17	新作オシラ神像	男像：382×(頭周156) 女像：365×(頭周142)	木・布		0315	東北学院大学博物館所蔵
18	新作オシラ神像	男像：316×(頭周176) 女像：278×(頭周134)	木・布		0316	東北学院大学博物館所蔵
19	新作オシラ神像	男像?：282×(頭周142) 女像?：271×(頭周152)	木・布		0317	東北学院大学博物館所蔵
20	新作オシラ神像	男像?：312×(頭周122) 女像?：290×(頭周120)	木・布		0318	東北学院大学博物館所蔵
21	新作オシラ神像	男像?：382×(頭周240) 女像?：352×(頭周220)	木・布		0319	東北学院大学博物館所蔵

■引用・参考文献一覧

- 岩崎敏夫 1973 『柳田先生と私の細道—東北の民俗文化』錦正社
 岩崎敏夫 1976 「わが師・柳田国男の原質について」『日本及日本人』(1534)日本及日本人社
 岩崎敏夫 1991 「初期の日本民俗学と私」『国立歴史民俗博物館研究報告』(34)国立歴史民俗博物館
 岩崎敏夫 1995 「柳田先生訪問記 一昔話研究のことなど」『岩崎敏夫著作集6 柳田国男の民俗学』岩田書院
 工藤員功 2008 『絵引 民具の事典』河出書房新社
 小玉敏 1984 「民俗玩具研究会の10周年を迎えて」『民玩』東北学院大学民俗玩具研究会OB会
 佐藤紀夫 1984 「民玩の思い出」『民玩』東北学院大学民俗玩具研究会OB会
 遠野市立博物館 2019 「遠野物語と神々～家の神・里の神・山の神～」遠野市立博物館
 福田アジオほか編 1999 『日本民俗大辞典 上』吉川弘文館

■執筆一覧

- 木暮遥奈：4P、16P
 福澤光稀：8～11P
 真柄 侑：1P、12～13P、18～20P
 増藤雄大：2～3P
 横山 舞：5～7P、14～15P、17P

■編集

熊谷式胡・増藤雄大

■監修

金子祥之・佐藤敏幸・永田英明・七海雅人

■資料一覧

- 【資料A】：議事録
 【資料B】：製作・活動記録

勉強のあとは
おもちゃを作ろう!!



図録コレミテ 9

編集・発行：東北学院大学博物館
発行日：2024年3月15日（初版）
〒980-8511 宮城県仙台市青葉区土樋一丁目3-1
TEL：022-264-6920
<https://www.ipc.tohoku-gakuin.ac.jp/tgum/>

✕ @tgum_museum

<https://www.wipc.tohoku-gakuin.ac.jp/tgum/>



wipc.tohoku-gakuin.ac.jp/tgum/

